HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本における臓器提供の事情とその背景について ： 「人間」の概念、匿名性、家族を中心として
Author(s)	ウゲット=カニャメロ, エンリック
Citation	北大宗教学年報, 2, 42-43
Issue Date	2019-08-31
DOI	https://doi.org/10.14943/90383
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75433
Type	departmental bulletin paper
File Information	hil_reli_2-6.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

【研究発表要旨】

日本における臓器提供の事情とその背景について

「人間」の概念、匿名性、家族を中心として

ウゲット＝カニャメロ・エンリック

日本は前世紀の後半から移植医療を取り入れたが、臓器提供率の最も低い国の一つである。その理由を理解するため、移植医療がもたらす道徳的な問題点を中心として、移植医療が日本という文化的な枠組みにおいていかに可能であるかを検討する議論に目を向けると良い。その中でも、特に二つの点が注目に値する。その点とは、脳死の概念、及び臓器提供における匿名性への一般的な抵抗感である。

脳死に関しては、その概念に対する世論及び学者たちの批判に共通している点がある。それは、脳の機能が完全に喪失することによって、患者が存在しなくなるということはない、という考えである。この考え方は、特に日本において強調され、「臓器の移植に関する法律」における死に関する二重規範にも反映されている。それと関連して、西洋の生命倫理の伝統における、人に最も特有な特徴としての理性を重視する理解とは明らかに異なる、日本における「人間」の概念が注目に値する。その概念は仏教思想に由来し、脳死の概念の下で示されるものと違って、人を理性や認識の働きではなく、他者との関わりのもとで定義される。「人間」の概念は、存在の構成要素として、つながりや関係性などに与えられる重みが、日本の伝統を通じ、末木文美士や森岡正博のような、現代の日本における死生観についての代表的な理解においても見られ、示唆に富んでいる解釈である。

他方、移植医療における匿名性の問題は、二つの重要な要素に大別され得る。その一つは、家族間の臓器提供への一般的な容認である。統計によると、日本の移植システムにおいては、生体移植の数は死体移植の数をはるかに上回る。この相違は特に重要である。というのは、生体移植が通常家族間で行われる一方、脳死下の臓器提供及び心肺停止後の臓器提供は、法律上の匿名性に基づき行われるからである。加えて、もう一つの事実も指摘する必要がある。東アジア、特に日本、韓国、台湾における臓器提供は生体からの提供の方が大きな割合を占める。そこでは、アジア圏の各国における家族に特有な役割についての研究、特に儒教思想に焦点を当てて家族の重要性を説明する研究、または医療現場の場合、儒教思想がどのように家族の意思決定プロセスに影響を及ぼすかについての研究が重要である。

もう一つは、匿名性の下での提供が、ドナーとレシピエントのアイデンティティにもたら

す変化に対する不安感である。その違和感は、とりわけ死体からの臓器提供の場合に見えてくる現象である。山崎五郎によれば、その現象は臓器を受け取ったレシピエントが、臓器提供が匿名化されているため、ドナー、そしてそのドナーの家族に対する感謝の言葉を表せないことと関連している。彼によると、それは典型的な交換の形成に影響を与えて、当事者のアイデンティティに変化をもたらす。しかも、移植の当事者の表に現れない気持ちに注意を払わなければならない。なぜならば、上述のことは匿名性のもとで行われる世界中の臓器提供に当てはまるとはいえ、感謝の気持ちが現れないことに対する反応は世界中どこでも同じではないからである。ここでは、日本の贈り物の文化、特にその中の返礼義務への重要性を忘れてはならない。

したがって、家族への重要性及び臓器提供におけるアイデンティティの変化が、身近な臓器提供への受け入れを反映すると同時に、匿名性の下での臓器提供に対する不安感をも示すと考えられる。この指摘は、脳死の概念への多くの批判が軸とする、より関連的な人への理解と共に、移植医療が日本という文化的・社会的な枠組みにおいて、さらに発展するために重視すべき点であると考えられる。